

D-29 建築材料の texture の主観的総合評価指標とその評価法の簡易化の検討
大阪市大生活科学 ○北浦けほる

今日、建築デザインにおいても texture の果たす役割は大きく、建材の texture の主観的評価を得ることは重要な意味がある。しかし、texture の成因は複雑で、多岐にわたるため、それらを総合する指標を設定する必要がある。本論では主観的評価指標として、やわらかさを設定し、その有効性の実験的検討を行うと共に、その評価法の簡易化を考察している。

〔実験〕 texture の物理的性質の分類結果より、予備実験をもとに texture の物性を表す 19 の意味尺度を設定した。実験材料は最終的に 12 種に絞った。試料の大きさは 30cm x 30cm である。触覚判断(実験 A)、視覚判断(実験 B)、視+触判断(実験 C)と知覚別に一対比較法を行った。やわらかさについては評定尺度法での実験も行った。被験者は男女各 5 名、計 10 名である。

〔結果と考察〕 実験毎の各尺度間の相関関係から、尺度のグループ分けを行った。次いで一対比較実験による総合的やわらかさ評価と各尺度間の相関を求めた。各実験とも Structure を表す尺度と Fracture の中の触感にかかわる尺度では相関が特に強かった。色やパターン等触覚で判断出来ない尺度については相関がみられなかった。色、パターンを除く 15 の尺度について、やわらかさの評定値は各尺度の平均値に近似していたため、やわらかさは主観的総合評価値として適用出来ると考えた。

又、やわらかさの、一対比較法と評定尺度法による評価値の関係をみると、いずれの実験においても、1 に近い非常に高い相関がみられた。この結果評定尺度法による実験の精度と有効性が明らかに示された。今後、評定尺度法を用いることにより、実験の簡易化を計ることのできるものと考えられる。